名大の時間 570

名寄での新生活

「こちらで充電しておきますよ」。この言葉が名寄に来て最初の驚きであった。初めて名寄に降り立ち、面接までの緊張した時間を過ごす中、スマートフォンの充電が切れそうになった。観光案内所で充電スポットがないか尋ねる私に案内所の方がこの言葉をかけたのだ。

地元では、充電スポットかカフェで充電するのが常であったため、少し驚きながら名前を伝え充電をお願いした。少し不安もあったが、それは全くの杞憂に終わった。駅前の食堂でやや急ぎ気味に食事を済ませ戻ると、充電され生き返った私のスマホが返ってきた。

しばらくして2度目となった名寄で買い物に出かけた。100円均一のお店で輪ゴムを探したが見当たらず、店員さんに尋ねると、棚の一番下の輪ゴムを示してくれた。お礼を伝えたところ、続けて「色々な種類がありますが大丈夫ですか」と言われた。

取り立てて特別な目的もない、ありふれた日常に埋没するであろう輪ゴムである。「大丈夫です」と答え、箱を見ている私に店員さんは見本を見せながら一緒に選んでくれた。輪ゴムを買うために接客してもらったのは人生で初めての経験であった。

私のキッチンの引き出しの中の輪ゴムの箱にこんなストーリーがあるとは誰も想像しないであろう。今までは商品の場所を尋ねた時は案内されて終わりであったし、それが普通だと思っていた。しかし、名寄ではその先にまだ対応の続きがあり、親身になってくれることに驚いた。

そして、その後に訪れた郵便局や電気屋さんでもよい驚きと感動は続いた。初めて来た街で、これからどんな生活になるのか不安だった私の心に灯りがともった気がした。

名寄に住む人々の相手に「寄り添う」温かさを感じるとともに、これまで助産師として働いてきたが、私は本当の意味で看護の対象者に寄り添うということをしてきたのだろうか、と今までの人生を反芻（はんすう）した。

そして、そんな街で私も人に寄り添う教員になりたいと、今までに見た中で一番白く輝く雪の上を歩きながら、強く願った。

看護学科助教
永井紅音